

---

# 彼と変態とわたし

千鶴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼と変態とわたし

### 【Nコード】

N2353BA

### 【作者名】

千鶴

### 【あらすじ】

茹だる様な夏のある日。

突然聞こえた声が、私を何処かへ連れて行ってしまった。

これは、そこで出会った彼と変態との攻防戦。

もしかしたらふとした時に下げて全編改稿するやもしれませぬ。

先に宣言しておきます。申し訳ありません(1/10)

## 前編（前書き）

主人公、ちらっとしか名前が出てきません。

## 前編

その日も、茹だる様な暑さだった。

「いやっもー！あつついんじゃー！！」

「うつさいばか」

「つい、いだあああ！！！！」

うぎゃあああ、と姦しい喚き声をあげている友人を、冷めた目で見つめる。

しばらくは殊勝にも我慢をしていたようだが、それがつい数分前に限界が来たようだった。

突然叫び出したので、間髪入れずに叩き落してやったのだ。

この暑い中に騒げばもっと暑苦しくなるではないか。叫んだところで気温が変わってくれるわけでもなし。

周りのことを考えて黙ってるとばかりに、ふんと鼻を鳴らした。

「うう……りいちゃんひどい……」

ぐずぐずと床に懐きながら、そんなことを呟く。

なんとも鬱陶しいので無視することにした。

そうすることにより余計嘆きが酷くなることは重々承知の上だったが、構えば助長する。

こういう場合は放置するに限ると、長年の付き合いで嫌という程知っていた。

「そんなに暑いなら冷凍庫にでもずっと入ってるよ」

「それ死ぬから！せめて冷蔵庫にしてっ」

冷蔵庫であろうと冷凍庫であろうと、いつまでも入っていれば死の危険がある。

その所はきつと深く考えていないんだろっなと思いつつ、紙パツクの牛乳を啜った。

先程買ったばかりのそれも、これだけ暑い日であるので、既に温い。友人の弁ではないのだが、流石にこちらもこの暑さは堪えていた。

じわじわくる熱気に、日の光がきらきらと照っていて、容赦なく肌を刺してくる。

脳内で寒い所へ行きたいな、などと思ったのは仕方のないことだと思っ。

むしろそれは誰にも責められるべきではないことだというのは、最早明確な事実であった。

そう、それは無理からぬことであり、通常であるなら何も問題ないことである。

しかし、強いていうなれば、このときは非常に運が悪かった。

(あー・・・涼しいところに行きたい・・・)

ぼつり、脳内に浮かび上がる願望。

それはただの夢や希望として、儂くも潰えるはずだった。

あの、誰ともわからぬ声が聞こえなければ。

『それ、叶えてあげる』

「・・・は？」

気付けば、吹雪が吹き荒ぶ氷の上に立ちつくしていた。

「・・・・・・は？」

灼熱の大地から、極寒の地にご到着。

頭ががんがんと痛むくらいの暑さの中から、寒いと言うより痛いと言ったほうが正しいくらいの寒気に包まれていた。

思わず思考も停止するだろう。

「・・・は？・・・つぶえくしゅ」

間抜けにも単調な言葉しか出なかった所へ、くしゃみ飛び出る。

そうしてようやく、それが現実であることを知った。

理解出来ないせいで感じにくかった寒さが、ここに来て身に突き刺

さる。

寒いというレベルではない。痛い。  
手足が瞬く間に感覚を喪った。

「・・・ちよ、ど、ゆ、こと」

声を出そうとしたが、擦れて上手く出してくれなかった。  
そもそも、呼吸すら困難な状況で、喋れるわけがない。  
そうこうしている間にも、寒さの余りか、歯ががちがちと鳴り始める。

独り言をいうために口を開いたが、すぐに後悔する破目になった。  
勝手に出てくる涙や鼻水が凍り始めたのが分かるくらい、極寒の地  
に来てしまったらしい。

舌がドライアイスにくっついたようになるのを防ぐ為、必死で歯を  
食いしばる。

そんなことが気休めにもならないことは、頭の片隅では理解してい  
た。

けれども、夏用の制服姿のまま飛ばされてきた身としては、それ以  
外に出来ることもない。

両腕で痛いくらいに身体を抱きしめて、その場に蹲る。

ここを離れ建物や岩陰に隠れるということすら思い浮かばなかった。  
今まで生きてきた中では自身の死を危惧するという事態に陥った例  
はないが、今がそうなのかもしれないと現実逃避のように考える。  
痛みを感じていたのも次第に良く分からなくなり、酷い眠気が襲っ  
てきた。

死亡フラグ死亡フラグ眠ったら即あの世行きとぶつぶつ呟きながら  
無理やり意識を繋げる努力を試みたが、それももう無理な気がし  
てきて焦燥感が募る。

まだ17歳なのに何それ、と非常に泣きたい気分になった。

しかし実際に涙は出てくることなく。

抵抗虚しく、やがて意識はふつりとなくなってしまったのである。

「……こんどはどい」

起き抜けの第一声がそれだった。

低血圧の為に起きたばかりでは頭が働かないのが常である。

それが、ぱちつとはいかずともすつと瞼が持ち上がり、ぱつというような勢いはないがずるりと身体を起こす。

閉じそうになる目を根性で開け、状況把握に勤しんだ。

ぱつと見てわかったことは、現在は室内に居ること。

何故か天蓋付の大きなベッドのど真ん中で、着替えた覚えのない衣服を身に纏っていること。

手足や身体のことかしこに、包帯が巻かれていること。

そして、今は朝らしい、ということ。

「……どこだ、まじで」

情報を一度自分の中で噛み砕いて、しかし結局さっぱりわからなかった。

あんな氷原ど真ん中の、吹雪で視界が最悪な中から、どうしたらこんなところに出るのか。

半ば呆然としながら無意識に手足をもぎもぎと動かすと、感覚は鈍くても一応動くことに酷く安堵した。

意識を喪つ前は、このままでは凍傷で壊死すると思えなかったのだ。

最悪、生きられたとしても、両手両足の指がなくなっても可笑しく

はなかった。

そこまで考えて、意識を喪った後に助け出された可能性が高いことに気付く。

では、ここはあの氷原にほど近い村か町かだろうか。

少しあるけば助けてもらえたかもしれないことに思い至ると、なんだか猛烈な勢いで力が抜ける。

どうしようもなかったとは言え、もうちょっと動け自分と思わざるを得ない。

友人たちに危機管理能力がないと言われるだけあるのかもしれない、と内心へこんだ。

「ああ、起きてたのか」

「っ！」

頂垂れて自己嫌悪に陥っていた所に、がちりとドアが開く音がして、誰かが入ってきた。

声からして男性、それも青年か。

ぱっと身体を起こしてシーツをひっかぶり、ずるずると壁側へ後ずさった。

助けてくれたのは間違いないのだろう。

手当もしてくれて、こんな部屋で1人寝かせてくれるくらいだ。

至れり尽くせりとまでは行かなくても、誰ともわからぬ者に対しては破格の待遇である。

感謝しこそすれ、怯える必要はない。

そこにまで考えが到っていても、未知との遭遇には恐怖心が募った。ここには馴染みあるものは何もないのだ。人も、物も。

その点で言えば、警戒してしかるべきなのではないかとすら思う。

どくどくと煩い心臓を抑えつけながら、その人物がこちらへ近づいてくるのを黙って見守った。

「なんだ、元気そうだな」

現れたのは、金の髪を腰まで垂らした、まだ年若い青年だった。少し切れ長の目は長いまつげに縁どられ、その瞳は綺麗な新緑である。

きめ細やかな肌に、精悍な顔立ち。

衣服を着ていてもわかるくらい、鍛えられた体。

どこからどう見ても、絶世の美青年と言えるくらいの人間がそこに居た。

「……………」

あまりの衝撃に言葉が出ずに居ると、青年はまじまじとこちらを見つめてきた。

何やら面白そうに口元が緩んでいるのを見て、じわりと内心で嫌な予感が広がる。

自身が平凡な容姿をしていることは良くわかってるし、こんな綺麗な人間とは住む世界が違うのだ。

見られていることにだんだん腹が立ってきた頃、青年はぶつと吹き出して、可笑しそうに笑いだした。

「…なにが、可笑しいのですか」

「っい、いや…悪い…」

無然とした面持ちになったのは致し方ないと思う。

思わず問いかければ、青年は必死で笑いを抑えながら謝ってきた。

しかし全くもって謝っているようには見えなくて、また非常に腹立たしくなり顔を背ける。

見てんじゃねーやちくしょうと言ってやりたいが、命を救ってくれた恩人にそこまで言う度胸はなかった。

悲しくも小市民である。

一頻笑った青年は、ようやく落ち着いたのかこちらに向き直ると、にこりと微笑んだ。

その笑みに、どうしても作り物めいた綺麗さが気にかかってマネキンのようだと思ってしまう。

怪訝そうな顔をしていたのだろう、青年は笑みを消すと、今度はマジメな顔を作った。

まるで百面相をされているような気がして、思わず眉根が緩みかける。

しかし、イケメンだからって絆されてどうする、ときゅっと力を入れ直した。

「さて、身体の調子はもう大丈夫なんだな？」

「・・・ええ、手足も動きますし、大事ありません。

助けて頂いてありがとうございます」

「いや、いい。しかし何だってあんなところに居た？」

しかも薄い服しか着てなくて、手足も出したまま。死にたいのかと思っただぞ」

くり、と小首を傾げられて、思わずつられて同じ動作をしてしまった。

どうしてあんなところにと言われても、それを一番知りたいのは自分だ。

「わかりません」

「わからない？それは一体・・・」

「あなたは、突然、こちらへ連れてこられたのでしょぅ。」

訝しげに目の前の青年が言葉を紡いでる途中で、第三者の声が割って入った。

いつの間に部屋に入っていたのか、さっぱり気がつかなかった。

しかし目の前の青年が一切驚いた様子がないところを見ると、彼は気付いていたらしい。

何その動物的反応、と思わず胡乱げな視線を送ってしまい、慌てて頭を振った。

そんなことは今どうでもいいのだ。

問題なのは、先程の発言の真意は一体どういうことか。

「その通りです。」

あなたは何か知っていますか」

図らずも見つめる視線に力が入ってしまうのも仕方のないことである。

しかし現れた第三者は、ふっと軽く微笑んだかと思うと、不意にこちらへと手を差し伸べてきた。

反射的にその手から逃れようと後ろに下がるも、あえなく手を掴まれてしまって、尚逃げ腰になった。

「逃げなくて良いのですよ。」

我らはあなたを庇護する者ですからね」

にこりと微笑んだ、その顔が酷く恐ろしい。

掴まれた腕は痛くないのに、どうしてか外れてはくれなかった。

良く考えなくても、異性は若干苦手だったのだ。  
しかも、対して知りもしない相手と接触するなど考えられないこと  
だった。

そう、割り込んできた第三者もまた、男だった。

それも最初の青年とはまた違ったタイプの美しい男。

その顔を見て、猛烈に逃げ出したくなったのは何故なのだろう。

ぞわぞわと怖気のようなものが背筋を這いあがり、今にも手を振り  
払ってしまいそうになった。

「おい、怯えてるじゃないか。

放してやれ」

「嫌ですよ。こんなさわり心地の良い手です、ずっと触っていたく  
なりますね」

瞬間、今までになく鳥肌が立って、血の気が引いた。

初対面の女性に対して吐いていい言葉ではない気がする。

虚勢は瞬く間に崩れて、恐怖心に支配された頭は、ひたすら逃走す  
ることしか考えられなくなった。

いくらなんでもこんな展開に順応しろというのは無理があると思う  
のだ。

「はっ放して・・・！」

ほとんど半泣き状態でずりずりと後ろへ下がろうとするのに、目の  
前の綺麗な男は逆に嗜虐的な笑みを浮かべてにじり寄ってきた。

掴まれた手を手繰りながらじりじりと近づくと顔に、本能的に恐怖す  
る。

綺麗な顔なのに、見ようによってはきつと女神か天女と言っても可  
笑しくない顔なのに、それが酷く恐ろしいのだ。

「っつ、うえええやだやだ放してばか変態しねっ!!」

恐怖が臨界点を突破し、泣き声を上げた次の瞬間。

唐突に、迫りくる天女はベッドへと沈んだ。

掴んだ腕はそのままに。

「・・・へ・・・」

呆気を取られながらも見やった前方では、青年が青筋を立てつつ椅子を抱えて仁王立ちしていた。

前編（後書き）

泣いていても暴言を吐くのは忘れないという。

中編 そのいち(前書き)

中編を分けるといふ暴挙

## 中編 そのいち

天女と見紛う青年は、稀にみる変態だった。

最初から既に良い印象はなかったけれども、実際に悪夢が始まったのは、次の日から。

そしてそれは、半年が経過した今も続いていた。

「リンカ、何処へ行くのですか？」

「う、うっさいこっち来るな変態！………いいいやだああああサイラスー！助けてーっ」

「……またやってるのかお前ら……」

美青年2人組に保護されて後。

現在は最初に会った美青年サイラスというの館に住まわせてもらっている。

保護されるにあたって、どちらが引き取るのかというところで一悶着あったが、おおむね平和な日々を過ごしている……はずだった。だった、というのは、衣食住を与えられて何不自由ない生活を送っているのに、今は心労ばかりが日々募って、そのうち爆発してしまうのではないかと思ったりもするのだ。

その最大で唯一の原因は、初日に出会った変態が、何をとち狂ったか毎日会いに来ることである。

会いに来るだけならまだしも、その際に非常に構ってくるのが問題なのだ。

初対面から良い印象を持たなかったこともあり、彼に会うと恐怖心ばかりが前面に出てしまうようになり、今では変態として認識してしまう始末である。

後から考えても、彼の言動は美人が台無しというか、もはや残念すぎて観賞用にもなりはしない。

そしてこちらとしては遭う度に虚勢を張るのだが、如何せん、追われると本能的にこのド変態に対して恐怖心が湧く。

それはもう理性など木端微塵となるくらいの勢いで。

そうして数秒も持たずに、今の庇護者であるサイラスに泣きつづのが常となった。

今日も与えられた部屋で大人しくしていた所に変態が現れ、慌てて逃げ出してきたのだ。

仕事部屋である執務室に飛び込んできた2人の人間を見て、精悍な顔立ちの青年が嘆く様に溜息を吐く。

立ち上った己の腰に張り付くようにしがみ付いた少女の頭を撫でてやりながら、どうにも仕事に手が着かないと密かに嘆息した。

「サイラス、リンカをこちらへ寄りこしてください。

あなたばかりずるいでしょう、毎日毎日一緒に居る癖に今もそんなにひつついて」

「・・・き、気持ち悪い・・・！言ってることが気持ち悪いよっ」

「ダメに決まってるんだろ、いい加減にしるかなん」

「リンカ、こちらへおいでなさい、たまにはいいでしょう」

「良いわけあるかっ！帰ればかっ変態！」

「・・・やれやれ」

サイラスを間に挟んで、おいで・嫌だ・おいで・無理の応酬が続く。ちなみにリンカが当初拙いながらも使っていた敬語は、カナンを前に初日でかなぐり捨てる破目となり、ついでとばかりにサイラスからは敬語そのものを禁じられている。

背の高いサイラスの陰に完全に隠れながら、リンカは目に涙を浮かべつつも必死にカナンの魔の手から逃げていた。

しかし、実はそういう姿を見せるからこの変態が調子づくということ、本人だけが知らない。

サイラスは棒立ちになったまま、ぐるぐると自分の周りを回る2人を暫し眺めた。

毎日毎日、飽きないことだと嘆息を零す。

本来サイラスもカナンもそう暇な立場に居るわけではないのだが、カナンはそんなことちらりとも窺わせることもなく、毎日リンカを訪ねて来ていた。

その度に仕事中であるサイラスまで巻き込まれるのは、最早恒例のこととなりつつある。

仕事を滞りなく終わらせて、たまにはリンカを町へ連れて行ってやりたいなどと、カナンの前では口が裂けても言えないことであるが。

「いやあああああつき、サイラスー！ー！！」

ついにカナンに捕まってしまったリンカが、泣き叫ぶようにサイラスを求めて手を伸ばす。

カナンに後ろから抱き上げられた形のままなので、いつものことながら、それはまるで子が親と引き離されたかのような光景に見えた。サイラスは内心で頭を抱えながら、リンカが必死に伸ばす手をきゅつと握ってやる。

そうするだけで安堵するように肩の力が抜けるのだから、サイラスとしても最近拾ったこの少女が可愛くてたまらない。

例えその背後で親友と思っていた男が悪鬼羅刹のような形相でこちらを睨み据えていても、その価値はあると思う。

「サイラス、その手を放しなさい」

「放していいのか？リンカがこれ以上ないってくらい泣くぞ」

「やつやだやだやだ！サイラス放しちゃうだー！カナンは放せ変態っ！！」

サイラスの言葉を聞いて本気で嫌がるリンカを切なげに見つめると、カナンは名残惜しげに解放した。

その困う手が離れた瞬間にサイラスへと飛び込んでいく姿を見つめつつ、心底悔しげに唇を噛む。

己が親友ながら、どこをどう間違ったのかと、サイラスはリンカを難なく受け止めながら思った。

サイラスの男性的な美しさとはまた違って、カナンは女性のような美しさを持つ。

それに今まで国中の老若男女が籠絡されて来たのだが、今のカナンの姿を彼らが見たらどう思うことだろう。

1人の少女に執着するだけならまだしも、すげなく袖にされているこの様を。

むしろ盛大に拒絶されているこの情けない有様は、誰にも見せられないとさえ思う。

「カナン、毎日来てるが仕事はどうしてるんだ？」

しがみ付いたあとにめそめそ泣き出したリンカをあやししながら、サ

イラストがカナンへと問いかける。

その光景を歯噛みしながら見つめていたカナンは、けろつとした顔で返答した。

「勿論、本日の分は終わらせてきましたよ。

流石に仕事を放棄してきたら、リンカは顔も合わせてくれなくなりますからね」

「当たり前だっつもの！てゆうーか来なくていい！ほんとに来なくていいからっ」

「・・・流石というべきか、その理由に悲しむべきか・・・」

仕事をせずつに來たら、リンカに嫌われる。

そんなくだらない理由でも、きちんと仕事を終わらせてくる辺り、この男は非常に有能なのだ。

卓上の業務が主である彼は自身の仕事の早さは勿論、人の使い方も心得ている。

サイラスは基本的に武官としての面が強い為、その業務内容はカナンとは異なる。

警備の統括も一手に引き受けているので、書類整理以外にも仕事があり、あまり身体が空かなかつたりするのだ。

しかし、カナンとてその有能さ故に、任されている仕事は常人よりも格段に多いはずである。

それを半日でこなしてしまうところが、得体の知れなさを醸し出しているのかもしれない。

ちなみに明日の分に手を伸ばさないのは、単にやることなくなる。それはそれで周りが迷惑を被ることが多々ある為、カナンの部下達が制限を設けている為である。

自己防衛でもあるその牽制が涙を誘った。

「サイラスはまだ仕事があるのでしょう？  
邪魔してはいけませんから、リンカはこちらへおいでなさい。  
私と一緒に遊びましょう」

「・・・うつ・・・い・・・」

こんな言い方をされて断れる人間はカナンぐらいかもしれない。  
サイラスの腰にへばりついたリンカが、それでも明確に否とは言えずに、せめてもと首を横に振る。  
仕事の邪魔をしたくはないが、それでもカナンと共に行くのは嫌らしい。

これは相当嫌われてるな、とサイラスは苦笑を零した。

「リンカ、今日はテイラが来ると言っていた。  
カナンとテイラと街へ行ってきたらどうだ？  
こちらへ来て以来、まだ外に出たことがなかっただろ」

「・・・・・・行く」

相当な沈黙を経て、リンカがこくりと頷いた。

内心で様々な葛藤があっただろうことを思うと、彼女は随分我慢する性質らしい。

もう少し我儘を言ってくれると嬉しいのだがなどと思いつつも、自分から言ってくれるようになるのを待つつもりでいるので、口には出さなかった。

一度、腰に縋る腕にきゅつと力を入れたあと、すごすごと手を放した少女に、思わず庇護欲をそそられて頭を撫でる。

なんだこの可愛いいきものは、とは思っても口には出さない。  
そうしてしまえば、カナンと同類になってしまう危険性があるから

だ。

今ここで周り全てが敵となってしまうはこの少女の精神が危うくなることも有り得る。

虚勢を張れるくらいには勝気なようだが、それも吹けば飛ぶような脆さしかないことは既に知っている。

これ以上の負荷は避けるべきだ。

「・・・ごめんなさい、サイラス。お仕事頑張ってね」

見るからにしょんぼりしながらの言葉に、ぎゅっつと心臓が締め付けられるような心地になる。

込み上げる衝動のままに頭を撫でると、リンカは頬を薄く朱に染め小さく微笑んだ。

非常に愛らしい笑みであるが、背後から絶対零度の寒気に襲われて、渋々ながら手を放す。

友人のこの溺愛ぶりには負けるが、サイラスとてリンカを猫可愛がりしているのは自覚していた。

正直に言えば今回のことだって自分が行けないことがものすごく残念なのである。

しかしそこは大人の余裕か、サイラスはぐつと堪えてリンカの頭をぱんと撫で、表向きは快く送り出したのであった。

中編 そのいち（後書き）

なんだこれと思わないでもない。

## 中編 そのに

「・・・ちよつと、いい加減にしてくださいませんか？あなたがた」

金髪美少女の吐く嘆息は、酷く申し訳ない気分になるものと、初めて知った。

しかしリンカには、それに対して今はどうしようもなかった。現在、自身の貞操を掛けた鬼ごっこの中なのである。死んだって捕まるわけにはいかなかった。

「だっただって・・・追っかけて・・・来る、のが悪いっ！！でもごめんねテイラ！」

「リンカ、いい加減止まらないと目を回してしまいますよ。ほらほら、テイラも鬱陶しそうな顔をしているじゃないですか。もうその辺で立ち止まったらどうなんです？」

「誰のせいだと思ってんだよおおお！うわぁあんもっ来るなー！！」

「リンカが止まって下されば私も止まりますよ」

「嫌だよ！絶対捕まえて放さないつもりでしょーがっ」

「それは勿論。サイラスの居ない今がチャンスなんですから」

「何がチャンスだよばかやるー！やだやだやだっテイラぁぁ助けー！！」

自分の周りでぐるぐると追いかけてこを繰り広げる2人を尻目に、美少女は更に深い溜息を吐いた。

リンカは傍目に見ても限界が近そうであるのに、尚も足を止めようとはしない。

そこまで嫌か、と美少女の目が細まったが、しかしそれとこれとはまた別の話である。

「ああまったく、サイラス様の普段のご苦労が偲ばれますわ」

そんなことを呟きつつ、一つ息を吐いたあと、腹に力を込める様に短く息を吸った。

それから美少女はくるっと身体を反転させると、ちよつと対面する形になったリンカの後ろ首のあたりをがっ掴み、動きを止めることに成功した。

リンカより華奢なはずの少女の、何処からこんな力が出ているのかさっぱりわからないが、この美少女は見た目にそぐわぬ膂力が備わっているのだった。

「ひえっ!?!」

悲鳴を上げながらも、首元を掴まれたリンカが猫の子のように大人しくなる。

そこへ、嬉々とした表情を浮かべながら近寄ってくるカナンに、テイラは無情にもそのまま押し付けたのだ。

無論、カナンはそのままリンカをがちり確保したあと、放そうとはしない。

思わぬ裏切りに一気に蒼白になったリンカは、慌ててテイラに抗議した。

「ちよつテイラひどい!何するのぉ!?!」

「こんな変態でも、一応はわたくしの上司なのよ。  
ごめんなさいね」

ティラは、サイラスの従妹にあたるが、その前にカナンの護衛兼側近なのだ。

ちなみに年はリンカと同じだと言うから、全く神様は二物も三物も一人の人間に与えすぎだろうと思う。

幼いころから共に過ごしてきた幼馴染の間柄でもあるので、ティラが基本カナンを敬うことはないのだが、身分で言えば彼女の方が下になる。

サイラスに保護されて一週間目に、ティラはリンカの元へ連れてこられた。

男ばかりに囲まれているより、同性が側に居た方が良いだろうというサイラスの気遣いである。

それから、見た目に反して漢らしいティラにリンカはすぐに懐き、彼女の方も満更ではないようで、度々こうして遊びにきてくれるのだった。

「それに、町に行く間くらい我慢なさい。

もうだいぶ無駄に時間を過ごしたのよ。

これでは何のためにわたくしがきたのかわからないわ」

「だってだからってえええ・・・!!」

「わたくしが居る間は襲ったりしませんわよ、ねえカナン様」

「ええ、こうしているだけで今は満足です」

「ですってよ。良かったわね」

「良くない良くないよっ ティラ待って！カナンは降ろして！歩ける  
つてば！！」

抗議し続けるリンカの言葉など、前をさっさと歩いて行くティラも、  
リンカを抱き上げたカナンも聞いてはくれることはなかった。  
そして、その3人の姿を上部にある窓から見下ろしつつ、サイラス  
が頭痛を耐えるように溜息を吐いていたことは余談である。

「わあ、すごいっ・・・さむ！痛いってゆーかデジャブ！！」

外に出た途端、刺さる様な空気の冷たさに、思わず身近の温もりに  
縋ってしまった。

自らひつついた手前なんとも言えないが、どうにもぞわぞわと背筋  
を這い上る感覚に悶える。

しかしここで再び手を放して、寒さに苛まれる気にはなれなかった。  
出てくる前に、もこもこの外套を着込んでこの有様である。

あまりの寒さに、フードを目深に被り縮こまった為、楽しみにして  
いた街の雰囲気も外観も人々さえもまったくわからなかった。

半袖シャツとスカートといった井出達でこちらに來た自分は結構本  
気で死が近かったのかもしれないと、今更血の気が引く思いだった。  
カナンは珍しく縋ってきたリンカにこれ幸いと、嬉々として密着度  
を上げつつ、迷いのない足取りで尚も道を進む。

その前をずんずんと勇ましく、金髪美少女が先導しているのが目に  
入る。

しかし、大人しく運ばれながら、無意識の行動とは言え浅慮すぎた  
かもしれないとリンカは思った。

普段寒い時、サイラスにくっついていていた弊害が、ここで出るとは。館の内はいつも暖められてはいるが、やはりうっすら寒いときがある。

そういつたときは、サイラスにくっついてるとちょうど良い温かさなのだ。

筋肉は熱を発していることを実物で証明しているようなものである。リンカに甘いサイラスが何も言わずに置いてくれる為、助長してしまったのかもしれない。

見た目に反して筋肉の綺麗についているカナンもまた良い保温材料であることは認めよう。

しかし、やはりこれはいただけない。

何しろ子どものように腕に抱きあげられている為に、非常に顔と顔の距離が近いのだ。

いくらなんでも身の危険を覚えずにはいられない。

そんなことをつらつら考えていたリンカは、先に行くティラが立ち止まったことに気付いて、きよとりと首を傾げた。

「ティラ？」

「一旦、こちらのお店に入りましょう、ちょっと吹雪いてまいりましたわ」

「そうですね、行きますよリンカ」

「ちよっつわ」

くりつと方向転換されたリンカは、慌ててカナンの首に縋りつき、内心でまた怯えるリンカである。

「・・・カナン、いい加減降ろして」

店は食事処だったらしく、温かなで良い匂いがした。

特に案内されるといったことなどはなく、ティラがさっさと席を取ると、カナンもそれに倣う。

そこまでは良かったが、その後からカナンの奇行が始まった。

さっと椅子に座ったかと思うと、その膝にリンカを降ろし、そのまま腕で固定してしまったのだ

リンカがどれだけあがこうがびくともしない。

散々抵抗した後力尽きたリンカが、呻くようにカナンへ声をかけた。

「何故ですか？くつつついていたほうが温かいでしょう」

「あなたとくつつくくらいならティラと一緒に居る！ティラっ」

「嫌ですわよ」

「なんで!？」

すっぱり期待を断ち切られたリンカが、悲壮感を漂わせながらティラを問い詰める。

最後の希望すら手元から飛び去っていくのかと、本気で泣きかけたリンカである。

「いかに変態であろうとも、上司に逆らう気はありませんわ。

それにリンカを与えておくと大人しいんですもの。

悪いけれどしばらくそのまま置いてくださいな」

しれつと言い放ったテイラのあまりの言い草に、リンカは絶句して固まった。

そうして、その日は結局吹雪が強くなってしまった為に遊ぶことから断念する破目になり、シヨックで動けないまま、大人しくカナンに運ばれたのだった。

「おかえり、楽しかったか？・・・って、おいおい、どうしたリンカ」

「・・・」

館に着いて即カナンの腕から逃れたリンカがとった行動は、まずサイラスにひつつきに行くことだった。

リンカが帰ったと見るや、椅子から立ちあがって出迎えたサイラスの腰に、黙ったまま縋りついた。

そんなリンカに驚きつつもいつものようにあやすサイラスを、追いついてきたカナンが悔しげに睨む。

一番最後にサイラスの執務室へたどり着いたテイラが見たのは、サイラスの腰にへばりついて顔を伏せるリンカと、そんなリンカをくっつけてあやしながら苦笑するサイラスと、2人を物欲しげに見つめる美貌の上司の姿だった。

せつかく開けた扉をすぐにぱたりと閉じてしまったとて、テイラに罪はないように思えた。

誰だとしてこんな空間に居たいとは思えないだろうから。

「只今帰りました、サイラス様」

「ああ、おかえりテイラ。悪かったな、こんな天気の中」

何事もなかったかのようにして再度部屋に入ってきたテイラが、サイラスへ帰宅を告げる。

サイラスはそれにまた苦笑を零しながらも、労いの言葉をかけた。

「いえ、途中で切り上げましたから問題ありませんわ。

それよりサイラス様、お仕事は終わりました？」

「ん？ああ、ようやくな」

唐突な質問に、サイラスが目を瞬かせながらも、素直に答える。

テイラは小さく微笑むと、依然サイラスの腰にひつつきむしとなっているリンカへと声をかけた。

伏せていた顔をあげたリンカは、完全に不貞腐れた顔をしていた。

「そうですね。でしたら、リンカ」

「・・・え？」

「わたくしは今日はこれで帰ります。

その代り、サイラス様が夕食時までお相手して下さいさるそうよ。

あ、そうそう、カナン様も置いて行きますから、そのつもりで」

「それは持って帰ってよ！」

「嫌よ」

テイラの台詞に間髪いれず返したというのに、その返答もまた素早かった。

そしてこうと決めた彼女が一切譲歩してくれないことも、この半年の間で既にリンカは知っていた。

が、しかし、期待しないでいるということは存外難しいのだ。

断られても、一縷の望みにかけてテイラを見つめていたリンカだったが、それを感知することなくテイラはあっさりと館を後にしてしまっただ。

毎回パターンは違えど、テイラに振られる形になるリンカである。

そろそろ学習しても良いころだろうとは思っても口に出さない青年2人は、ただ黙ってリンカの動向を見守るのみであった。

「サイラス……」

「よしよし、ほら来い」

悲しげに、へにやりと眉根を下げたリンカは許しを得てサイラスにへばりつき、カナンはそれを見て妬ましげに唇を噛む。

ここ半年で見慣れてしまった光景に、最初は動揺していた館に勤める侍女や下男達は、今では見て見ぬ振りをするようになった。

その事実にも、主であるサイラスはなんとなく物悲しくもなるのだが、しかし下手に注目されるよりは断然良いことであると知っていた為、敢えてそのままにしておいている。

サイラスは本日何度めかの苦笑を零したあと、リンカの頭を優しく撫でてやると、くっついていたリンカの体温が若干上昇していることに気がついた。

「リンカ？眠いのか」

「……んん〜」

赤ん坊は、眠くなると体温が高くなるという。

リンカもそれと同じ体質で、始終くっつかれているサイラスはリンカの眠気をそれで測るようになっていた。

問いかけるサイラスに、リンカはぐずるように甘えるような声を出す。

そんな光景を目の前にして、触れることも容易に許されていないカナンが鬼のようになっても、リンカがそれに頓着することはなかった。

つくづく美貌が台無しだよなどと、サイラスはカナンと目を合わせないようにしながら内心でそんなことを思うのだった。

中編 そのに（後書き）

ティラは見た目乙女の男前。

## 中編 そのさん

毎日変態に襲われて逃げるを繰り返していたら、日々は瞬く間に過ぎて行った。

今は、また幾度目かの、夏らしくない夏を迎えようとしている。

四季がないこの国で、リンカは逞しく生きていた。

「リンカ、こちらへおいでなさい」

「嫌ですいい加減にしてくださいっつーかいちいち触る必要が何処にあるんだこのド変態が！」

「……強くなったなあ、リンカ……」

困おうとする手を叩き落とし、変態の魔の手を掻い潜って逃げたリンカを見て呟いたのは、今も彼女の保護者をしているサイラスだ。半ば感動するように目を瞑り呟いたその言葉の意味を、ここに居るリンカ本人も実感していたところである。

突然世界に放り出されてから、3年と半年が経っていた。

保護された次の日から、一日も開けることなくカナンに追いかけて回されていたリンカは、ある日唐突に、怒りを覚えたのだった。

どうしてこんな変態に毎日毎日追いかけて回されなきゃならないんだろ、と。

何もしていないのに、そんなことをされる謂われはない。

おまけにそんなくだらないことで相手に怯える必要など小指の爪程もないことに気付いたリンカは、翌日から最大の敵であるカナンを、この際に克服しようと思った。

それから、本能的に湧き出る怯えを気のせいだと抑えつけ、猛抵抗を繰り返し、しかし接触は可能な範囲で、徐々に増やすことにした。

その甲斐あつてか、やがてカナンに怯えることも徐々になくなり、この一年程は、まるで見違えるようにリンカは冷静になり、時の流れと共に大人の女性へと近づいたようだった。

しかし性格だけで言えば、前に居た世界の友人知人からは冷めていると言われがちだった、昔のリンカに戻ったとも言える。

一度パニックに陥ると取り乱す癖があるが、基本的に周りに冷たいし投げやりなのがリンカの常であったのだ。

しかし、リンカのあまりの変貌ぶりに、館で働く侍女や下男が挙動不審になったのには苦笑するしかなかったサイラスである。

「サイラス、どうしたの？お仕事は？」

にこつと微笑んだリンカに、サイラスもつられるかのように笑み崩れて、胸の内から湧く衝動に任せるがままリンカの頭を撫でてやる。カナンに対しては非常に冷たくなったリンカだが、サイラスに懐いているという態度を変えることはなかったのは救いであった。

むしろ子どもっぽさが抜けたリンカの言動に、かつてとはまた別の理由で胸を鷲掴まれるサイラスである。

しかし、そうなると恐ろしいのがカナンの嫉妬だったが、何故か彼は依然ほどサイラスを睨むこともなくなったのだ。

その理由は、もちろんリンカにあった。

「仕事は今日は全部終わらせてきた。どうだ、遊びに行くなら連れてってやるぞ」

サイラスの提案に喜んだリンカが、勢いをつけて飛びつこうとするも、すぐに何かに阻まれるように動きを止めてしまった。

眉尻を悲しげに垂れさせて、上目遣いに見上げる様は、カナンでなくとも、何でも聞いてあげたくなくなるようなもので。

「……ちよつと、無理みたい……」

「……カナン……」

「なんですかサイラス」

リンカの腰に腕を回して彼女の妨害をしているのは、誰であろうカナンであった。

先程は華麗にカナンの手を避けたリンカだったが、一度や二度の拒絶に屈するカナンではない。

そもそも、カナンの嫉妬がサイラスへと向きにくくなった最大の理由は、リンカのカナンに対する態度が冷たくなりはしても、逆に触れさせてくれるようになったからだだった。

正気に返ったリンカは、カナンから逃げることを止めていた。

むしろ無駄な抵抗は早々に諦める様になっており、それがカナンにとっては都合の良いことだったのだ。

今も大して拒絶しないリンカの腰に腕を回して彼女の行動を制限している。

リンカはサイラスとの会話の途中で、カナンの手が延びてきたことに気付いていたが、とりあえず無視していたのだった。

サイラスはもはや力の入らなくなった四肢を投げ出して、ソファにどっかりと腰を下ろすと、疲れ切ったように大きな溜息を吐く。リンカの成長を嬉しく思う反面、親友の退化ぶりに涙が止まらない。

「お前は一体何をしてんだよ・・・」

「リンカに抱きついていますが何か」

「何かじゃありませんよこの変態。いい加減放してください、邪魔です」

泣きたいのを堪えつつカナンに問いかけたサイラスだったが、あまりにもなカナンの返答に、ついに頭を抱えてしまった。

最近では、リンカが拒絶らしい拒絶をしない為、助長している節がある。

が、それでもこれは酷いのではないかとサイラスは瞑目しながら思った。

月下の麗人とまで称えられた男が、一体何をしているのだろう。リンカは心底鬱陶しそうに、すり寄ろうとするカナンの顔を片手でつつぱっている。

この光景を見ているのは己一人であるを知っていても、何故か非常に悲しくなるものなのだ。

なにを一体どうしたらそうなるんだ、とこの3年半、幾度問い詰めたかわからない。

もともと、大なり小なり酔狂を好む性質であると知っていたが、以前の彼は確かに常識人と言っても良い人となりであり、かつ周りに慕われている賢人として名を馳せていたのだから。

あまりにも悲壮感漂うサイラスを見かねて、リンカが声をかけた。

「サイラス・・・気にしたらダメだと思うの。元気出して」

「そうですねよ、何を悲しんでいるのか知りませんがそんなしけた面  
似合いません」

「誰のせいだと思ってるんだ」

優しいリンカの慰めに心癒されると、当の原因からも言葉をか  
けられ、思わずサイラスは撥ねつける様に言い返した。  
何が悲しくてこんな思いをしているのか、わかっているのだろうか。  
きつと、わかつていて敢えて言っているのだろう。

リンカを抱きしめながら、カナンはにやにやと笑っていた。  
サイラスはその顔を見て無性に苛立ったが、カナンを敵に回しても  
良いことはない為、早々に諦めた。

どれだけ変態と言われていても、結局この男に敵うものはいないの  
だ。

「カナン、いい加減離れて。鬱陶しい」

「嫌です。いくらリンカの頼みでもこればかりは聞けません」

「仕事は？」

「明後日分までは終わらせてきました。それ以上は部下に制限を設  
けられています」

「・・・あ、そ」

逃げてても逃げてても、へばりついてくるカナンに、リンカが匙を投げ  
た。

抵抗するだけ無駄であると思うと何故か非常に腹立たしいが、致し

方ない。

サイラスの向かいのソファに腰かけたカナンに引き摺られるようにして、自身も腰を降ろした。

膝に抱え上げられ、後ろから抱き締めつつ、リンカにちよっかいを出してくるカナンを意識から締め出す。

諦めは、肝心だ。

これ以上するようなら黙ってはいられないが、カナンはそれ以上のことはしてこない。

それはリンカが嫌がるからに他ならないが、それ故にリンカはある程度までは許すことにしたのだ。

リンカが死ぬ気で嫌といったことは、絶対しない。

逃げていた間も本気だったと思っただが上には上があるものだ。

カナンとリンカの妥協出来るラインは、ここまでだとお互いに承知しているからこそこの今である。

傍から見れば、天女の如き美しさを持つ青年に抱き締められるのは、周りの人間からすれば垂涎ものの願いなのかもしれないと、最近は余裕が出来たせいもあってそんなことを考えられるまでに成長した。リンカにとってはかなりどうでも良いことであるし、出来れば勘弁願いたいことなのだが、見た目が見た目だ。

黙っていれば、100人が100人、胸を撃ち抜かれても可笑しくはない美貌である。

おまけに、リンカにとっては変態でしかないが、カナンに憧れて彼の下で働きたいと志望する若者は多いと聞く。

本人にすれば本意であるが、そんな彼にまとりつかれているリンカは、密かに憧れの的となっていた。

愛されてる、というわけではないと思っている。

けれども、どうしてここまで執着されるのかはわからない。

思い返せば、ここに来た経緯すらリンカには到底理解出来ない方法だったのだ。

そして、あの誰とも知れぬ、『声』の正体も未だにわかっていない。カナンが何かしら知っているようだったが、初日に受けたあまりの衝撃でその辺を有耶無耶にしまい、今日まで至ってしまった。この際だ、聞いてしまうのもありなのかもしれない。

今が好機であると見たリンカは、カナンとサイラスを見つめながら、口を開いた。

中編 そのよん（前書き）

別名、事情暴露編

## 中編 そのよん

「カナン」

「ん？なんですか、リンカ」

「出会った日に言っていましたよね、私がこちらへ連れてこられたとかなんとか」

「・・・ああ、」

「それ、どういう意味ですか。何か知ってるの？」

後ろから抱きこまれる体勢は、敢えてそのままに。

何故か彼の顔を見ることが怖くて、後ろを振り向けなかったのだ。

少し迷ったあと、リンカは抱えていた疑問を直接ぶつけることにした。

目の前のサイラスは、真剣な顔をしてリンカの目を真っ直ぐに見ている。

リンカはそれに応えるように視線を合わせながら、意識だけは背後のカナンへと集中させた。

「・・・そうですねえ、これはリンカも知っておくべきでしょう」

暫しの沈黙を間に挟み、カナンは静かにそう言った。

きゅ、と腹の上の腕に力が入るのを感じた。

「もう、3年半が経ちましたが、リンカはこちらへ来た時のことを覚えていますか？」

背後から問われて、来たときのことを回想する。

あの日は夏休み半ばに設けられている登校日で、リンカは学校に居た。

例年稀に見る猛暑日だと、その日の朝ニュースで言っていたことを覚えている。

地域的に最高気温が国内でも上位に来るくせに、クーラーなどはない学校だった。

そしてその時は、ちょうど昼休憩を取っていたのだった。

昼食を食べ終えた後、暑さのせいで何もする気が起きなくて、手慰みに友人にちょっかいをかけて。

それから・・・それから、そう、確か、寒い所へ行きたかった。あまりにも暑くてしんどくて堪らなかつたから、口に出すのも億劫で、涼しい所に行きたいなと思った。

ただ、考えたただけだった。

「・・・あの日は、凄く暑い日で・・・涼しい所に行きたいなと思ってたの。」

そしたら、変な声が聞こえて、それで・・・次の瞬間にはここに居た・・・」

この国の、吹雪の中で、独り寒さに震えてた。

リンカはまるで夢を見ているような頼りない声で、ぽつりぽつりと零してゆく。

目の前に居るはずのサイラスは、今はその目に映っていない。

リンカは言葉を続けながら、無意識にふるりと身体を震わせた。

「最初寒いとかそんなレベルじゃなくて、めっちゃくちゃ痛かった。けど、すぐに感覚もなくなって、意識も真っ白になって。気が付いたら、ベッドの上で、それからサイラスが来て、カナンが来て……」

記憶にあるだけを吐きだしてみても、大した情報はなく、声は尻すぼみとなって消えた。

この3年半、元の世界のことを考えなかった日はなかった。何故ここへ来たのか、あの声は一体何なのか、どうしたら戻れるのか。

考えても考えてもわからなくて、必死で調べても手掛かりさえみつからなかった、その理由を。

カナンならわかるのだろうか、と半ばぼんやりした頭で考えた。

「……あなたがここに来る前、声を聞いたと言いましたね。その声は、男でしたか。女でしたか」

静かな、いつもより気持ち低めに抑えられた声が、更に問う。何故だかそれが酷くカナンらしくないと思ったけれど、リンカは素直にその問いに答えていた。

「男、だと思っ」

「それは、何故？」

「……わからない……声は確かに、女性と言われても違和感はないくらいの高さだった……」

けどどうしてかな、あれが女の人の声だったとは思えないの」

「他に気付いたことは？」

「若い、男の子みたいだった。私より年下の。故意じゃなくて、無邪気に、私のお願いを聞こうとしてくれたよ。うな気がする」

「そうですね・・・」

背後で、重苦しい溜息を吐かれた。

いつも飄々として、リンカが何を言っても表情を変えなかったカナン、こんな重苦しい雰囲気は初めてだと思った。

言ったことは、本当にそう思ったからだった。

声の調子から悪意や害意は受け取れず、逆に少し喜色を浮かべて、そう、まるで小さな子が得意満面に誰かのお願いを叶えようとしているような。

そんなことを考えている自分は、客観的に見てきつと可笑しいんだろうなと、リンカはあまり動こうとしない頭で考えた。

「あの日、何故私がここに来たのか、それが理由です」

「・・・どういう意味だ？」

「そっぴゃ、そうさううちに来ないのに、あの日は先触れもなく突然来たんだっただか」

カナンとリンカのやりとりを大人しく聞いていたサイラスが、訝しげにカナンに問う。

来るとは知らなかったのに、突然部屋に現れたカナンに不審な顔ひとつ見せなかったサイラスの器の大きさに対して、リンカは密かに驚いた。

「此度のこと、かの御方が、やったことですからね」

「・・・誰？」

「げっ」

重々しく告げられた言葉に、リンカとカナンの声が重なった。

リンカは心底わからないと言った顔をしているが、サイラスはその『御方』の見当がついたのか、非常に嫌そうに顔を顰めている。

こつり、リンカの背中に何か固いものが当たり、カナンが頂垂れたことを知る。

普段なら避けるところだが、なんだか非常に疲れているようなのでそのままにしておくことにした。

「・・・カナン、それ、だあれ？」

表面上は変化はなく、リンカ自身もいつも通りだと思っていた。

しかし、思ったよりも低い声が出て、腹の上の腕がぴくりと反応した。

「・・・・・・」

珍しく黙った背後霊のようなそれに、見えていないと知りながら、リンカが微笑む。

それを真正面で見ただサイラスが、瞬時に蒼白な顔になった。

「・・・カナン、教えて」

お願いしているわけではない、その声に、室内の空気が更に重くな

った。

「……この国を治めているの国王が、3年半前に代替わりしたことは、以前お話ししましたね？」

「……聞いたけど？ 今代は、従弟殿が就いたのでしょ？」

「……この世界には、魔法と呼ばれる力があることも？」

「……来て一ヶ月目で、サイラスとカナンから聞いたね。」

精霊も神様も実在するなんて、どこのファンタジーかと思っただけ。  
「」

「私が、この国で、術師として最高の地位にいることも？」

「覚えているよ。その割には毎日遊びに来てるけど」

ここで、一度問答のようなやりとりが途切れた。

リンカは、質問に一々答えながらも、どんどん重苦しくなるような心地で居た。

カナンは深呼吸をひとつすると、リンカに落ち着いて聞いて下さい、と前置きをしてから、ようやく本題に入った。

「臣下として、私の地位は最上です。」

しかし力だけで言うならば、たった1人、もっと上の方が居らっしゃるのですよ。

「……いえ、正確には、居たというのが正しいですか」

「……ねえ、カナン……」

「ええ、きつとリンカの思い描いている御方で間違いありません」

「この国の、先代皇帝陛下が、あなたをこちらへ召喚したのです」

意味がわからない。

カナンの言葉を聞いた次の瞬間に、世界がぐらりと揺れた気がして、思わず両手を前に差し出した。

しかしそれは用を為さず、背後から伸びていた腕に簡単に抱きとめられる。

それに意識を向けることも出来ず、リンカは浅く呼吸を繰り返した。

「リンカ、大丈夫ですか？」

「リンカ、大丈夫か？」

同時に聞こえた、酷く心配げな声に、いつの間にか瞑っていた目を開いた。

一気に貧血になってしまったかのように、血の気が下がっている気がした。

「……大丈夫。ごめんなさい」

もう一度目を瞑って、静かに息を吸って、吐く。

そうして自身を落ちつけると、リンカは自分を囲う腕からするりと

抜け出した。

いつもならがつちり捉まえて放そうとはしないその腕は、今はあっさりとそれを許す。

リンカは全てを知るカナンの足元に跪き、下から彼の顔を真っ直ぐに見詰めて、問う。

しかしそれは、お願いというような声音では決して無く。

「カナン、知ってること、全部教えてくれるでしょう？」

真剣な顔をしながらも、教えてくれなかったらどうなるかわかるよね？と言外に告げていた。

カナンは観念したように一つ息を吐くと、それから苦笑しつつリンカに首肯してみせたのだった。

カナンの説明からわかったことは、こんなことだった。

曰く、リンカが召喚されたその日に逝去された皇帝陛下は、当時13になったばかり。

生来身体が弱かったが、魔術には非常に長けていた。

ちなみに皇帝になったのは、彼が10の頃だという。

幼いながらも非凡な才を見せつけていた彼が皇帝になったのは、事情があつたからだ。

先々代の皇帝陛下に子どもは4人居たが、いずれも様々な理由で亡くなられてしまって、末っ子であるしか残らなかつた。

彼は年を取ってから生まれた子どもだったので、子でありながら孫程に年が離れていたらしい。

当然、親である先々代は、先代よりも早くに亡くなられた。死因は老衰であったという。

それから、唯一の後継者として、先代は即位した。勿論後見人という名の有能な宰相が居て、貴族院も優秀な者が揃っていたから、そう問題はなかった。

若い皇帝は仕事もしていたが、大抵は寝込んでいて、宰相がそのほとんどを肩代わりしていたと言つてよいだろう。

そうして寝込んでいる間、彼は魔術の本を寝台に持ち込んで、ひたすら暇を潰していたらしい。

もとより頭の出来は良い彼である、周りの知らぬ間に、めきめきとその力を伸ばして行った。

そして、気付いた頃には、彼は遙か高みにまで行ってしまっていたのだ。

「・・・カナンより、凄い人だったの？」

話を聞いていたリンカが、真顔でぼつりと零す。

それに苦笑を返して、カナンはまた話を続けた。

「幼い身でありながら、彼は別格だったのですよ。

・・・しかし、そうして魔術を修めたにも関わらず、彼は病魔には勝てなかった」

「それが、3年半前・・・私が来た日のことなのね？」

「そうです。

リンカが呼ばれたその僅か後、陛下は亡くなられました。

亡くなる数時間前から私は側に居たのですが、ふと意識をなくしたと思つたら、陛下はそれから一時間後に目を覚ましました。

そして、意識をなくす寸前、笑いながら夢うつつに、こんなこと

を仰っておられました」

「・・・なんて？」

カナンの言葉の続きを、聞きたくないと呼ぶ自分と、聞かなくてはならないと思う自分が喧嘩をする。

しかし、聞きたいと願う気持ちには逆らえず、おずおずと先を促した。

脳内では悪い予想しか出てこず、リンカは我知らず、縋るように一番近いカナンの服を握っていた。

「・・・それ、叶えてあげる、・・・とまるで誰かがすぐそばに居るかのように」

それからすぐに、陛下は亡くなられました。

リンカはすうっと血の気の下がるような心地になって、ふらりと倒れ込みかけた。

今度はカナンの衣服に自分から縋ることと倒れることを阻止出来たが、頭の中では先程の言葉がぐるぐると廻っていた。

私、幽霊の声聞いたの・・・？

正確に言えば、それは死ぬ前であるので、幽霊ではない。

生霊の類が一番近いのかもしれないと思いながら、それぞれと這いあがる怖気に怯えた。

リンカは自身の理解出来ない現象というものを、認めることが出来ない。

つまり、幽霊やポルターガイストなどといった心霊現象は、大の苦

手なのである。

死ぬ前だからと言っても、正直、怖すぎる。

リンカは青い顔で目に涙を溜めながら、必死でカナンに縋った。

少し前まで彼から逃げ回っていたのが嘘のようである。

カナンは、しかし今ばかりは苦笑して、優しく困ってやるだけに留めていた。

「ど、どうして・・・どういうことなの・・・！ていうか世界が違うの  
に何で・・・！？」

あまりにも動揺したせいで言いたいことの半分も言葉に出来なかつた。

体験したことの無い恐怖に、がたがたと身体が震える。

とうにか死にかけの先代皇帝陛下に召喚されたという己は、一体何なのかと思ってしまうた。

「陛下が亡くなられたことで、あなたを元の世界に還す術もまた無くなりしました。

・・・しかし、リンカ。

誤解はしないで頂きたいのですが、陛下に悪気はなかったのです  
「よ

「悪気があつたら余計怖い！！」

「・・・きつと、純粹に、願いを叶えてあげたかっただけなのでし  
よ。

陛下はその立場故、あまり他者との接触もありませんでしたし、  
他愛ない願いを叶えるといった経験もなかったはずです。

涼しい所と言ってこちらに連れて来てしまったのは・・・頭の良  
いお子でしたが、この国を愛しておられたせいでもあります。か

国とここの気温差をご存知なかったのですよ」

「………わからなくてもないけど、でも怖いもんはこわいよーっ！っ！」

ホラーが人一倍嫌いなリンカである。

幽霊まがいのものと交流を図るには、度胸も勇気も足りなかった。あまりにも動揺が酷く、元の世界に還れないことをさりと告げられたことすら気付かなかった。

サイラスが困ったような顔をしながら、リンカの頭を撫でる。

その手の温もりにほっとしながらも、その体勢のまま、しばらく動けなかったのだった。

ちなみに、何故異世界人であるリンカの思考を、先々代皇帝陛下が読み取れたのかと言えば。

幽霊ではなく、生霊として世界を越え、リンカの世界にやって来ていたせいだった。

生霊状態の彼は、生身の人間に触れるとその人間の考えを読み取る事が出来る。

勿論触れられたほうは全く気付かないので、若き皇帝は調子に乗って色々な人間に触れていた。

しかし、表面を取り繕いながらも内心で魔逆のことを考えている人間の、なんと多いことが。

皇帝が半ばうんざりし始めた頃、昼の直前の授業を受けるリンカに（一方的に）出会った。

授業を受けながらも、必死と睡魔を孤軍奮闘する少女に、皇帝陛下の興味が惹かれたのだ。

それから授業が終わっても、昼食を取っていてもリンカの側居続け

た。  
そうして最終的に、脳内に浮かべた願望を勝手に叶えてしまったのだ。

その後、当人がどうなったのかは、神のみぞ知る。

当時のことを考え、思わずぞっとしたリンクは、突き上げる衝動のまま頭を抱えたのだった。

中編 そのよん（後書き）

終わりませんでした。

もう一話で終わる・・・はず・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2353ba/>

---

彼と変態とわたし

2012年1月14日12時59分発行